

チベット絵画における異種のブラウン

—デゥマルゲシェの混色理論—

小野田俊蔵

チベット絵画の伝統の中において混色理論は常に一定の関心を持たれ議論が重ねられてきた分野である。小稿は、18世紀後半にチベットで活躍した医師であり美術評論家でもあったデゥマルゲシェ・テンジンプンツォク De'u dmar dge bshes bstan 'dzin phun tshogs (1725-?) が記述する混色理論の中でも二種のブラウンに関する技法を紹介し、その問題点を指摘することを目的とする。

デゥマルゲシェが著した美術理論書『クンセルツンギ・レリム *Kun gsal tshon gyi las rim*』の第8章には様々な混色理論が記述されている。著名な中国のチベット研究者ルォビンファン羅秉芬女史はこの書の中国語訳を1997年に公刊したが、同書にはチベット語原文は付されていなかった。

かつて2001年に北京で開催されたチベット学研究集会で私は鉱物色材の化学反応に関して発表をおこなった。この発表はその前年2000年にオランダのライデンで開催された国際チベット学会で筆者が発表したもの (Onoda 2002) を発展させた発表であったが、発表直後に私は羅秉芬女史本人から手書きのチベット語原文写しの提供を受けた。その数ヶ月後、その北京の学会に参加していたアメリカのチベット学者ジーンズミス Gene Smith 博士からも、同じくデゥマルゲシェが著した医学論書『ソリクチェートゥ・リンチェンテンワ Gso rig gces btus rin chen phreng ba』のコピーを送っていただいた。その書には当該の『クンセルツンギ・レリム』の第8章の文章がほぼ完全に再録されていたのである。本稿はこれら先輩諸氏からの提供やご指導なくしては存在しない。記して謝意を申し述べたいと思う。

さて、同書第8章には159色の複合色の混色法が説明されている。その混色法の幾らかは他の数名の著者による断片的な記述と共通する部分も存在するが、異なる方法もあるので、それらと比較しながら考察を進めた

い。比較しうる絵画理論書とは、ポトンパンチェン・チョクレーナムギエル Bo dong pan chen Phyogs las rnam rgyal (1375–1451)、ミパムギャムツォ Mi pham rgya mtsho (1846–1912)そして、ロンタ・ロブサンギャムツォ Rong tha Blo bzang rgya mtsho (1863–1917)によるもの等である。

本稿では肌色あるいは茶色ときには桃色と称され得る一群の色がどのような混色理論のもとに作られるのか、という問題を扱う。英語ではbrown ブラウンあるいはpink ピンクと称される色にほぼあたる。チベット絵画の世界ではこれらの色は大きく分けて二種の作られ方をする。つまり、胭脂 *skag* (lac-dye)と白土 *dkar* (=ka rag : white chalk)を混ぜて作られる場合 (=type a)と、朱 *mtshal* (vermilion)と白土 *dkar* を混ぜて作られる場合 (=type b)とである。

Type a) 胭脂系ブラウンとその支分色

先ずデウマルゲシェが解説する「ナルー (na ros = 褐色)」の作り方を見よう。

dkar dang rgya tshos bsres pa la/

na ros zhes bya de la yang/

skag shad che 'bring chung ba'i mthus/

na dmar na ros na dkar 'byung/ De'u dmar [MS : 24; SRCT : 114]

白土と胭脂とが混ぜられるとナルー (褐色)が作られる。胭脂の度合いによって、胭脂が多い場合、中位の場合そして少ない場合でそれぞれ、ナマル (na dmar = 赤褐色)、ナルー標準色 (na ros = 褐色)そしてナカル (na dkar = 白褐色)が出来る。

しかしこの「ナルー色」の作り方には異説が存在していたようだ。15世紀初めの博学者ポトンパンチェンは二種のタイプのブラウンに関して特別に言及している。

/khyad par na ros dmar skya ni/

/dkar po dangs pa'i rigs rnam la/

/rgya skyegs snan pa na ros yin//

/dmar skya mtshal dkar legs par snang/ [Bo dong : 257-5]

ナルー色とマルキャ（淡赤）色との違いは、もし純粋な白土に胭脂が混ぜられるとナルー色が得られ、もし朱が混ぜられるとマルキャ（dmar skya=淡赤色）が得られる。

ポトンによれば、ナルー（褐色）は胭脂系のブラウンであり、マルキャ（淡赤色）は朱（=水銀朱ヴァーミリオンvermilion）系のブラウンということになる。

この「ナルー」色に関して、19世紀末から20世紀にかけて活躍したロンタ・ロブサンギャムツォは次のように説明している。

dkar la skag bsres na ros te/

dmar skya legs par 'byung ba yin/ [Rong tha : 183]

白土に胭脂が加えられるとナルー色つまり

みごとなマルキャ（淡赤色）が得られるのである

skagというのはrgya tshos と同じで胭脂つまり「ラックマルーン」のことである。ロンタは更に次のように言う。

dkar la li chu bsres ser skya/

mtshal chu bsres pas mtshal skya yin/ [Rong tha : 183]

もし白土に、薄めたミニウムが混ぜられると、セルキャ（ser skya=淡黄色）が出来、薄めた朱を混ぜるとツェルキャ（mtshal skya=淡朱色）が出来る。

ロンタはマルキャ（淡赤色）とツェルキャ（淡朱色）を区別しているようだ。上述したポトンの記述、つまり殊更にナルー（褐色）とマルキャ（淡赤色）を区別して説明している理由を考えて見ると、その時代にはすでにこの混色法に異説が存在し議論があったことが推測出来るのである。

このナルー色から様々な混合色が作成される。デウマルゲシェの混色法

では、モンカ(mon kha=藤色)とチンカ(mchin kha=肝臓色)がナルー色を使って作られると説明されている。

na ros dag la rams (MS : ram) *bsres pas/*
mon kha zhes bya rams (MS : ram) *shed kyis/*
mon dkar mon dngos (SRCT. sngon) *mon nag gsum/*

De'u dmar [MS : 25; SRCT : 114]

純粋なナルー色にインディゴ(木藍)が加えられると、モンカ(藤色)と呼ばれる色が得られる。インディゴ藍の割合に従って、三種つまりモンカル(mon dkar=白藤色)、標準色のモンカ(藤色)、そしてモンナク(mon nag=暗藤色)の三色が得られる。

そして更に、

zhib par na ros rigs gsum po/
re rer rams (MS : ram) *shes che 'bring chung/*
byas pas mon kha (MS : kha'i) *rigs dgu 'byung/*
De'u dmar [MS : 25; SRCT : 114]

さらに詳しく言えば、ナルー色の内の三種別のそれぞれに加え方の大中小があるのだから、合計九種類のモンカ(藤色)が生ずることになる。

このモンカ(藤色)の支分に関して中国語訳者は「九種類」を基本的な三種類の他に数えて番号付けをしている。

因藍胭比例不同而成栗米色(28)，土雞冠花色(29)，青箱子色(30)；再細棕色可分三種，各自加藍靛比例不同又大，中，小三種，故可分為九種蓼子草色(31-39) [Luo : 54]

いかなる理由でこのような数え方になったのかは定かではないが、この九種類に基本的な三種類は含まれているものと筆者は判断する。

さて、ロンタの混色法を再度見てみよう。ロンタはモンカ(藤色)とチンカ(肝臓色)に関して次のような説明を与えている。

/na ros rams bsres mon kha dang/
/de la cher bsres mon sngon zer/

もしインディゴ藍がナルー色に加えられるとモンカ(藤色)が出来る。
そして、その時に分量を多くすると[その色は]モンゴン(濃藤色)と
呼ばれる。

ロンタの言うモンゴン(濃藤色)は、恐らくデゥマルゲシェのモンナク(暗
藤色)に近いものと思われる。

ロンタは更に続けて、

/mon kha ser skya bsres mchin kha/

/dkar shas che ba mchin skya'o/

/mchin kha skag bsres mchin smug zer/ [Rong tha : 183]

モンカ(藤色)にセルキャ (ser skya = 淡黄色 = ミニウムに白土を混ぜ
て薄めたもの)を混ぜると、チンカ(肝臓色)が出来る。

その時に白土の度合いが多くなるとチンキャ (淡肝臓色)が出来る。

チンカ(肝臓色)と胭脂が混ぜられるとチンムク(暗肝臓色)と称される
色が出る。

デゥマルゲシェによるモンセル(黄藤色)とチンカ(肝臓色)に関する記述を
見てみよう。

mon khar ser bsres mon ser zer/

mon khar ser skya bsres pa la/

mchin kha zhes 'byung mon dkar la/

sbyar bas mchin skya mon nag la/

sbyar ba de la mchin nag 'byung/ De'u dmar [MS : 25; SRCT : 114]

モンカ(藤色)に黄色を混ぜたものはモンセル(黄藤色)と称される。淡
い黄色が混ぜられた場合にはチンカ(肝臓色)が出来る。モンカル(淡
い藤色)に淡い黄色が混ぜられた場合にはチンキャ (淡い肝臓色)が出
来る。暗いふじ色が混ぜられた場合にはチンナク(暗い肝臓色)が生じ
る。

チンカの支分についてデゥマルゲシェは次のように説明している。

mchin khar skag bsnan mchin smug 'byung/

*mchin khar bab la cung zad bsre/
 mchin ser mchin pa nad btab mdog/
 na ros nang du snag tsha'i g.ya'/
 bsres pas (MS : la) mchin nag rigs gcig 'byung/*

De'u dmar [MS : 25; SRCT : 114]

チンカ(*mchin kha*肝臓色)に胭脂が混ぜられるとチンムク(*mchin smug*暗い肝臓色)が出来る。

チンカに少量の石黄＝オーピメントが加えられるとチンセル(黄色がかった肝臓色)が出来る。肝臓病の黄疸のような色である。ナルー色にごく少量の炭＝カーボンが混ぜられると別種のチンナク(黒肝臓色)が出来る。

また、伝聞であることを断りながら、デゥマルゲシェは、他の胭脂系のブラウン色についても言及している。

*Rgya mthing na ros dang sbyar na/
 mchang (MS : 'chang) kha zhes zer de bzhin du/
 bar mthing na ros sbyor (SRCT. sbyar) ba la/
 mchang (MS : 'chang) chen zhes su bshad pa thos/*

De'u dmar [MS : 30; SRCT : 114]

ギャティン(*rgya mthing*インド産の群青?)とナルー色を混ぜると、チャンカ色と呼ばれる色が出来る。同じように、バルティン(*bar thing*)をナルー色と混ぜるとチャンチェン色と呼ばれる色が出来ると説明されるのを私は聞いたことがある。

中国語訳ではこのチャンカ色を「死屍色」と訳しているがその根拠は明らかではない。恐らく *mchang kha* が訳書の元となった手書き写本で *chang kha* と綴られていることが原因であろう。また、バルティン(*bar thing*)が何を指すかは不明だが「中程度に粉碎された岩群青」という意味であろうと考える。

Type b) 水銀朱系ブラウンとその支分色

朱(=水銀朱)と白土を混ぜて作られる色は「マルキャ (淡い赤)」と呼ばれるのみでなく、「ミシャ (人肌色)」とも称される。つまり人物像の肌の色を彩色する際に使用されるのである。

デゥマルゲシェは次のように説明している。

dkar po bzhi gsum dag la ni/

mtshal gyi kha bun bzhi cha gcig/

bsres la mi sha kha sha dkar/

mtshal (MS : *tshal*) *kha cung bskyed sha dmar 'ong/*

De'u dmar [MS : 25-26; SRCT : 114]

白土を四分の三と水銀朱四分の一を混ぜると、人肌色 *mi sha* あるいは白肌色 *sha dkar* が出来る。朱の分量が少し増えると赤肌 *sha dmar* が出来る。

ロンタによる説明は以下のようなものである。

/dkar la mtshal skya bsres sha dkar/

/de las che bsres sha dmar zer/

/de la ram bsres rgan sha'i mdog/

/sha dmar ba bla bsnan sha ser/ [Rong tha : 183]

白土にツェルキャ (淡い朱色)を加えると、シャカル (*sha dkar* 白肌色) が出来る。その割合を増やすとシャマル (*sha dmar* 赤肌色) が出来る。もしインディゴ (木藍)を加えるとゲンシャ色 (老人の肌色) が出来る。赤肌色に石黄 (オーピメント)を加えるとシャセル (*sha ser* 黄肌色) となる。

ロンタによれば、黄肌色は赤肌色に石黄を加えて作ると説明しているが、この点でデゥマルゲシェはロンタと意見を異にしている。デゥマルゲシェの説明では、

mi sha kha [MS : *la*] *bab la chung/*

bsres pas sha ser 'byung ba'am/

li khri 'am (MS : *lam*) *ni ldong ros rnams/* (MS : *dang/*)

bsnan pas sha ser rigs gnyis 'byung/ De'u dmar [MS : 26; SRCT : 114]

もしミシャ（人肌色）に石黄がほんの少し混ざるとシャセル（黄肌色）が出来る。ミニウムあるいは雄黄などが加えられると異なった種類の黄肌色が生ずる。

ロンタの上記の説明で、老人の肌色が白肌色に木藍が加えられて作られるのか、あるいは直前の説明にある赤肌色に木藍が加えられるて作られるのか、ロンタの記述は曖昧である。この老人の肌色についてのデゥマルゲシェの説明は、

mi sha kha la tshon rams (MS : *ram*) *bsres/* (SRCT : *bsre/*)

rgas sha drang srong bram ze'i mdog/

zhes (SRCT : *ces*) *bya'i sha sngon 'byung bar snang/*

De'u dmar [MS : 26; SRCT : 114]

人肌色に木藍が加えられると、「老人の肌色」「バラモン仙人の色」が生ずるのである。

更にデゥマルゲシェは、

mi sha kha la smug po bsnan (SRCT : *bsre*) /

de la sha smug 'byung ba yin/ (MS : *ni/*)

mi sha kha la mon kha bsre/

de (MS : *der*) *yang sha smug rigs gcig 'byung/*

De'u dmar [MS : 26; SRCT : 114]

ムクポ（smug po栗色）が人肌色に加えられると、シャムク（sha smug栗色）がかった人肌色）が出来る。もし、モンカ（ふじ色）が人肌色に加えられると、別種のシャムク（sha smug栗色）がかった人肌色）が出来る。

いままでの説明では人肌色を基準にして他の色材を加えながら黄肌色や

青肌色や白肌色などを作ってきた。それらは仏画の中で菩薩や苦行者等の性格の違いを表現する為に使われるのであるが、それらの人間の肌を表現する黄肌色や青肌色や白肌色などに更にゴキヤ (sngo skya = 岩群青に白土を混ぜたもの)を加えながら動物の毛皮の色が作られていく。

sha dmar nang du sngo skya chung/
bsres la (SRCT : pas) ri dwags mdog zhes (SRCT : ces) smra/
ri kha de yang sha dkar dang/
sha dmar sha ser sha smug dang/
sha sngon (SRCT : kha) sbyar gzhi' (MS : bzhi'i) khyad par las/
ri dkar ri dmar ri ser dang/
ri smug ri sngon lnga ru 'byung/
 De'u dmar [MS : 28; SRCT : 115]

少量のゴキヤ (淡い群青)を多量のシャマル(赤肌色)に加えると動物の皮膚色と称されるものが得られると言われている。このリカ(動物色)も、[添加の土台となる] シャカル(白肌色)シャマル(赤肌色)シャセル(黄肌色)シャムク(暗肌色)そしてシャゴン(青肌色)の違いに従って、リカル(白動物皮膚色)、リマル(赤動物皮膚色)、リセル(黄動物皮膚色)、そしてリムク(暗動物皮膚色)、リゴン(青動物皮膚色)の五種が生ずる。

肌色と淡赤色の他にも、白土と水銀朱を混ぜて作られる色が存在する。それはロカ glo kha (肺色)と呼ばれている色である。デゥマルゲシェは次のように説明している。

mtshal skya nang du dkar chung (MS : cung) bsres (SRCT : bsre)
dmar skya glo ba'i kha dog 'byung/ De'u dmar [MS : 26; SRCT : 115]
 少量の白土が[更に]ツェルキヤ(淡朱色)に加えられていくとマルキヤ [あるいは] 肺の色が生じる。

デゥマルゲシェは更にロカ(肺色)の支分についても説明を加えている。

glo khar ser bsres glo ser te/

glo ba nad kyis btab pa'i mdog/
glo kha (SRCT. ba) dkar shas che ba la/
dmar skya lcags bsreg mdog ces zer/
glo khar skag bsnan glo smug dang/
rams (MS : ram) bsnan glo sngon rnag g.yos mdog/
 De'u dmar [MS : 26-27; SRCT : 115]

黄色がロカ(肺色)に加えられるとロセル(黄肺色)が出来る。病気に犯された肺の色である。また、更に「それよりも」白土の度合いが多くなると、鉄を溶かした明るい赤色と呼ばれる色が出来るとされる。また肺色に胭脂を加えるとロムク(暗肺色)となり、木藍を加えるとロゴ(青肺色)「化膿した肺の色？」が出来る。

デウマルゲシェの説明するロカ(肺色)の製法と全く異なる意見を述べるのが19世紀末に活躍した博学者ミパム・ギャムツォである。ミパムによれば、

glo kha zi hung skag gi bu [Mi pham : 88]

ロカ(肺色)とシフン(うす紫)は胭脂の子供色

つまり、ミパムはロカ(肺色)をtype A)の胭脂の混合色と見なしているのであろう。ボトンが峻別しようとした胭脂系の混合色と水銀朱系の混合色との混同は近世まで引き継がれていると言える。

(本稿は、筆者が以前に英文で発表したもの “De'u dmar dge bshes's method of compounding colours — lac-dye brown, vermilion brown and the colours derived from them —,” Tenth Seminar of International Association for Tibetan Studies, St.Hugh's College, Oxford, 6th-12th September, 2003に改稿を加え邦訳したものである)

略号

(MS) = De'u dmar dge bshes bstan 'dzin Phun tshogs. *Kun gsal tshon gyi las rim me tog mdzngs ster ja' 'od 'bum byin.* 『クンセルツンギ・レリム』

(SRCT) = De'u dmar dge bshes bstan 'dzin Phun tshogs. *gSo rig gces btus rin*

chen phren ba. 『ソリクチュエートゥ・リンチェンテンワ』

チベット語原資料

De'u dmar dge bshes bstan 'dzin Phun tshogs, *Kun gsal tshon gyi las rim me tog mdzngs ster ja' 'od 'bum byin* (羅秉芬女史による手書きチベット語原文写し)

-----, *gSo rig gces btus rin chen phren ba*, Mtsho sngon: Mtsho sngon mi rigs dpe skrun khan (青海民族出版社), 1993.

Bo dong Pan chen Phyogs las rnam rgyal (1375-1451), *Mkhas pa 'jug pa'i [sgo] bzo rig sku gsung thugs kyi rten bzhengs thsul bshad pa*. In his Collected Works. New Delhi : Tibet House, 1969, vol.2, 215-65. See also, vol. 9, 461-501.

Mi pham rgya mtsho (1846-1912), *Bzo gnas nyer mkho za ma tog*. In his Collected Writings. Gangtok : ed. Sonam Topgay Kazi, 1975, vol. 9, 71-138.

Rong tha Blo bzang dam chos rgya mtsho (1863-1917), *Thig gi lag len du ma gsal bar bshad pa bzo rig mdzes pa'i kha rgyan*. New Delhi: Byams-pa-chos-rgyal, n. d.

二次資料

Jackson, D. and J. Jackson, *Tibetan Thangka Painting*. London: Serindia, 1984; 『稿本チベット絵画の技法と素材』(邦訳：佛教大学アジア宗教文化情報研究所, 2008, 瀬戸敦朗・田上操・小野田俊蔵共訳)

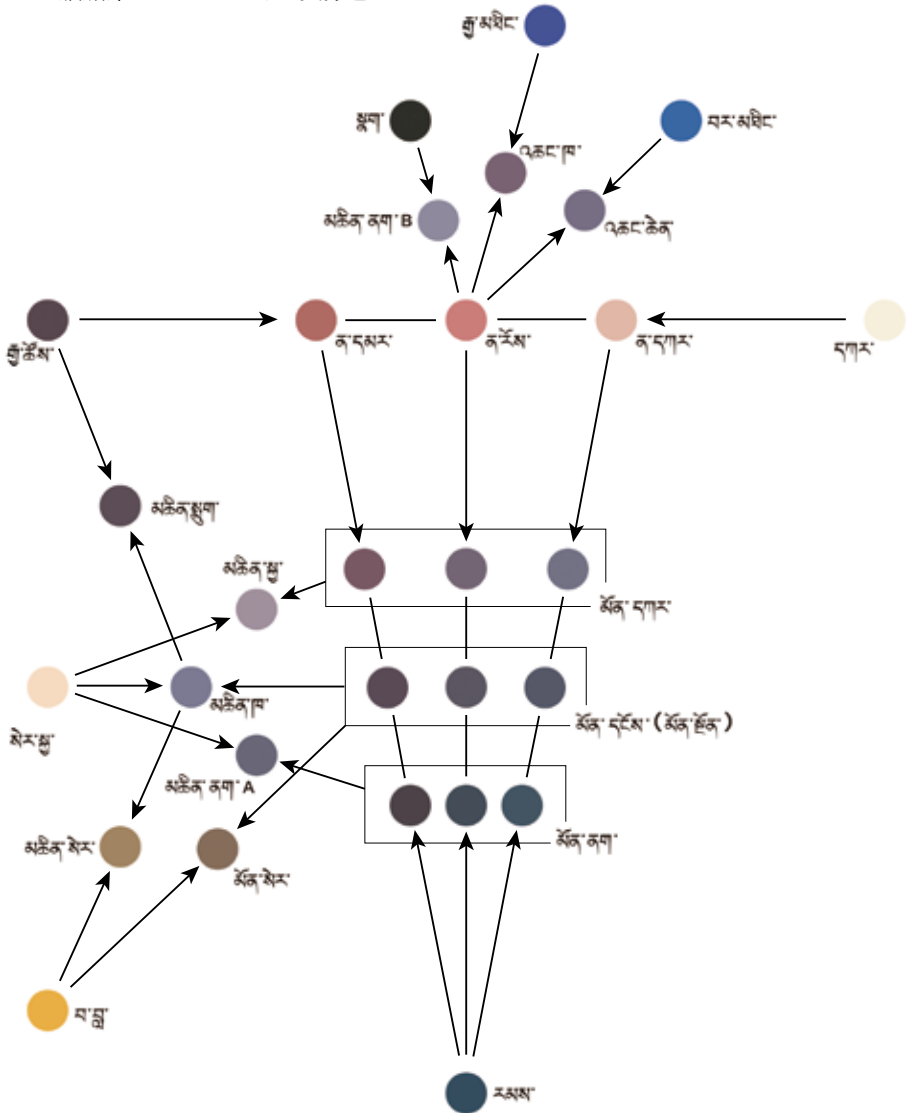
Jackson, D., *A History of Tibetan Painting, The Great Tibetan Painters and Their Traditions*. Vien: Verlag Der Österreichischen Akademie Der Wissenschaften, 1996; 『チベット絵画の歴史 —偉大な絵師たちの絵画様式とその伝統—』(邦訳：平河出版社, 2006, 瀬戸敦朗・田上操・小野田俊蔵共訳)

Luo Bingfeng (羅秉芬), 『西藏佛教彩繪彩塑藝術』中国藏學出版社, 1997.

Onoda (小野田俊蔵), "Some Inconsistencies of Colour Composition Techniques in Tibet." In *Impressions of Bhutan and Tibetan Art*, Tibetan Studies III. ed. John Ardussi & Henk Blezer, Brill, 133-38, 2002.

小野田俊蔵「チベット仏画の色材」『国立民族学博物館研究報告別冊』18号, 国立民族学博物館, 1997.

胭脂系ブラウンとその支分色



チベット絵画における異種のブラウン

